

---

# 天国からの眼差し

茅野 遼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天国からの眼差し

### 【Nコード】

N8175F

### 【作者名】

茅野 遼

### 【あらすじ】

ふわふわと足元の覚束ない可笑しな空間。此処は天国？それとも三途の川ベリでしょうか。老夫婦の短い短いお話です。

## （前書き）

短編に挑戦してみました。  
ませ。

時間つぶしに軽く目を通してください

ああ、またあの子は、前も見ないで、あんなに勢い良く走って……！ あ、危ない！ ほら、ちゃんと足元を見ないと……。

「お前は、また見ているのか？ あの子も、もう、九つになるんだ。転んだくらいじゃどうにもならないさ。 ひざ小僧を擦り剥くくらいだろう。 ここでハラハラしていたって、どうにも成らない事だと言うのに、全く……」

この人は、相変わらず何においても人事なこと。 私の始めてのお産の時にも、こうやって呑気に構えていましたっけ、そう言えば……。

あら、始めまして。 あなた、何時からここで見ていらしたんですか？ いやだわ、一言お声をかけて下されば良かったのに。

いえね、私は、あの浜辺で遊んでいる子供を見ていたんですよ。今年で九つになる、女の子です。 え？ あまり活発そうなので、男の子とお思いになったんですか？ そうねえ、あの子は、ちょっと女の子にしては、活発過ぎる処がありますわねえ……。 私どもの孫なんですけれどね。

隣で老眼鏡をかけて、それでも見難いと見えて、目を細めながら古い物語の本を読んでいる人は、私の夫です。 雲の上にいるみたいな、足元がフワフワしてしまつて、力も漸う入れられない様なこの場所で、自分の好きな椅子をこさえて、今はのんびりと寛いでいるけれど。 昔は本当に働き者で……。 こちらに来たのも、若い頃の無理が祟つた結果、身体を壊してしまったのが、原因でしたわねえ……。

こつちでこの人と再会してから、漸く三年くらい経ったかしら？

とは言え、あなたもご存知でしょうけれど、こちらの世界には時間と言う概念がありませんから。私もあの子の成長を見る事で、漸う、過ぎた年月を数えることが出来るのですけれどね。

あなたは、まだまだお若い様ですわね。……ご病気ですか？

え？ 事故で。それは大変でしたわねえ。こちらに来てしまった者共にとっては、余り分らない事ではありますが、残された者たちにとっては、その後に、本当に色々な用事がありますからねえ。あ、転んだ！ あらあら、服が砂だらけ……。怪我はしなかったのかしら？ ああ、砂浜で良かった事……。

あら、ごめんなさいね、つい、孫の方が気になってしまつて……。え？ あなたの妹さんも、活発なお嬢さんなんですか。

あなたの妹さんと言うと、二十二、三歳くらいの娘さんかしら。あら、そうですね。歳が離れていらつしゃつて、まだ今年で十七歳なんですか。ご両親は、あなたがこんな事になって、随分、悲しまれた事でしょうね……。

あなた、ご結婚は？ そう、まだでしたか。ご両親の気持ちも理解するのが難しいですつて？ ……そうかも知れせんわね。私も夫婦は、幸い子供達よりも先に旅立つ事ができましたけれど。あなたはもう一度、あちらへ戻つてやり直さなければなりませんね。

やり直し方が、分からないと仰いますか？ 私も詳しい事は存じませんが、先ずは心を落ち着けて、ご自分の中へと降りて行く事から、始めると言う事でしたかしら……。

けれど、心だけの様な今の覚束無い状態では、それも難しい事。先ずは、あちらへの未練と言う物を、断ち切らなければならぬそうですね。それでないと、まっさらな始まりの状態へと戻る事が出来ない、聞いたことがございます。

どなたから、お聞きしたかしら……？ ごめんなさいね、ちょっ

と覚えがないのですけれど。　ここから、もつと先に進んだところにいらつしやった方だったと思いますよ。

大層、物知りな方で。　お名前は忘れてしまいましたが、私がこちらへ来たばかりの頃、主人を探す方法を教えてもらったんです。

主人があちらの世界で、まだやり直しをしていなければ、必ず会える筈だと仰つて。　そのお話をされた時に、やり直し方を少しだけ教えて頂いたんです。

いえね、私も、もしもこちらに主人がいないようなら、知り人も無いこの世界で一人長い時間を過ごすよりは、やり直してしまいたいと思つたんですよ。

え？　ええ、私は主人を慕つておりました。　あらあら、空咳なんかして。　今更、恥かしがることでもねえ……。　この人は、昔から照れ屋な人でしたから。　ふふふふ。

あら、そうですか？　もう少し進んで、その物知りな方をお探しになりますか。　此処から進む時には、お足元に十分、ご注意なさいます。　私達のように、その場所に落ち着いて居る者がいない辺りは、この雲の様に軟らかい床が、急に抜けてしまつたりするそうですから。　静かに、静かにお進みなさいね。　ごきげんよう。

「何人目かな、お前が世間話のついでに、道案内をして来た人は……。　毎日毎日、此処から下の世界を覗いては、ハラハラしたり、嬉し涙を流したり」

「いちいち、数えては居ませんけれど。　……よくも飽きないものだ、と、仰りたいのかしら？」

この人の言いたい事は、その事でしよう。　時間の概念も無く、下の世界を覗き見ること以外には、特に大きな変化も無い。

何事も無く過ぎる一日こそが、本当の幸せな日々だと、皆さん仰います。　それは、生ある者達には共通の概念と言うものでございましょう。

まだお若い方には、その言葉の真意は計りかねる事かも知れませんが、けれど、人としての人生を全うして、この場所に辿り着いた私どもには、良く分かる言葉でございます。

私が、この場所を動かこうとしない訳は、不慮の事故などで、こちらの世界へ来てしまった方、特に若い方達に、何時までも現世の後悔を引きずるよりも、改めて、本来の寿命通りの人生を全うする為に、輪廻を受容する事ができる気分になって貰いたい、そのために、少しでもこちらの世界の事をお伝えしたいと、思っているからなのですが。

主人は、良くこの私の我が侘に付き合ってくれております。  
「一人切でこんなところに居ても、寂しいだけだろうからな」と、そう言って一緒に居てくれているのです。

昔、それこそ随分と若かった頃、あの人は、こう言ってくれた事があります。

「一生、いや、いつかこの世からお互いが旅立つその後までも、僕はあなたのそばに居る事を約束します。ですから、結婚、してください」

そう。あの言葉があの人からのプロポーズでした。

律儀な人でしょうか？ その言葉通り、この人は今も私の側に居てくれている……。

私が、いつか、再びこの人と結ばれる来世を約束されるまで、精一杯、絆を司る特別な存在、分かりやすい言葉で言い換えれば、人々が、神と呼ぶ大きな存在、あの方のお手伝いを、何十年、何百年かかって、し続けようと思っておりますもので……。

この人は、その時が来るまで、本当に一緒に居てくれるのかしら

ねえ……。

私は、信じておりますけれど……。

あら？ また人生を全うし切れなかった悲しい魂が、川の向こうからわたってきた様子ですわね。 あの方にも、道案内をさせて頂いた方が、宜しいかしら？

「お前のおせっかいも、筋金入りだな」なんて、ぼやきながら、主人が本から顔を上げて、私のほうを見てくれました。

「ええ、そうかもしれませんね。 あの方にも、道案内、させて頂きたいと思っていますわよ」

私はそう言って、こちらに向かってくる新しい魂に、小さく笑いかけました。

「さて、今度の方は、どんな事情がありかしらねえ」

「好きにきなさい。 おっと、この物語も、もう終わりか。 次の本でも、探すとしよう」

夫はそう言って、のんびりと腰掛けていた椅子から立ち上がりました。

「新しいご本が見付かったら、また戻ってくださいませね？」

私はそう言って、夫を見送りました。

あら、新しくいらした方も、もうそこまでおいですわね。 主人が戻るまで、話し相手をお願いしてしまおうかしら？

さあ、今度の彼女は、いったいどんな事情があって、こちらの世界へ渡ってきたのかしらねえ……。

《続く？ かも知れませんその内に》



（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8175f/>

---

天国からの眼差し

2010年10月11日15時07分発行